

普段着で集える 茶の間をつくろう！

特定非営利活動法人 まちづかい塾 [岡山県瀬戸内市]

テーマ

「夕まち・人まち・牛まろび」で
よっこら処！

活動の概要

公共空間の有効活用を目指す団体が、空き家も地域の公共空間であると捉え、住民に馴染み深い空き家を高齢者等の集える地域の茶の間（てんころ庵）として整備した。

設立年月 2003年2月（2009年 法人化）

メンバー数 65人
代表者名 青木 俊也

連絡先

〒702-8006 岡山県岡山市中区藤崎25番地
特定非営利活動法人 まちづかい塾
事務局 藤本 真理子
tel 086-277-2777
fax 086-276-2229
e-mail info@michicafe.net
URL <http://www.michicafe.net>
<http://blog.canpan.info/michi-mach>

わたしたちについて

「まちづくり」から「まちづかい」への移行。
公共空間の有効活用のオープンカフェから始まった
コミュニティカフェ。空き家も公共空間を形成する1パート。
改修し、地域拠点として有効活用を促進しています。

活動に至った理由や背景

コンセプトは
「まちづくり」から「まちづかい」への移行

NPO法人まちづかい塾は、2005年4月、公共空間を有効活用するオープンカフェ実行委員会として生まれ、烏城公園（岡山城）の一隅で珈琲を無料で配布する無料休憩所、オープンカフェを始めました。毎月、第一第三の土曜日の開催です。

○公園内にカフェハウスオープン

2007年度、H&C財団の助成金（第15回住まいとコミュニティづくり活動助成）で機材庫「カフェハウス」が出来たことで、機材を運ぶ手間がなくなり、誰でも何時でも開きたい時に管理団体の許可を取れば、オープンカフェ※を開催できるようになりました。今は、常連さんも一緒に、機材の出し入れを手伝えます。※オープンカフェ開催の詳細については、第15回住まいとコミュニティづくり活動助成報告書参照。

○たまり場……

いろいろな人が、オープンカフェで「公共空間」を楽しめます。でも、楽しむのは心地よい空間と珈琲だけではなさそうです。おしゃべり。知らない人同士が顔見知りになり、「あの帽子の伯父さんはもう来たかな?」「赤い自転車で来るお姉さんはまだかな?」と、名前も知らない常連と逢うことが楽しみになっています。観光客も、常連に交じって地域の穴場情報を聞いたり、地元自慢を語ったり……。

毎年花見に県外からここへ来て珈琲を飲む、というグループや、出張で岡山へ来た時は、必ず立ち寄るというサラリーマン。ここで、何気ないおしゃべりを楽しむ。オープンカフェは公共空間の有効活用だけでなく、自由なコミュニティづくりの場になりました。

○空き家

街は、道や広場やそれらを囲んだ建物で構成されています。この建物が空き家となり、ただ朽ちていくのは、もったいない。シャッターの下りたままの商店、主を失った民家……。

少子高齢化。街には高齢者だけが残り、空き家が増えてきました。空き家が増えると町は色あせ、活気がなくなり、治安が不安定になり、地域コミュニティが希薄になっていきます。

一人暮らしの高齢者には、一日に20分以上のまとまった時間、しゃべる機会のない人が多くなっています。自立が孤立になり孤独になってきます。孤独死、そんな問題も出てきました。地域コミュニティの絆をもう一度引き締め、一人でも安心して地域で暮らせる仕組みが必要になってきました。

空き家、これも公共空間の1パートと考え、地域コミュニティの拠点「地域の茶の間」として、有効活用を始めました。

○空き家利用の「地域の茶の間」+オープンカフェ

住居があつても、長年就労に時間を費やし、地域活動に参加したことのなかつた人は、なかなか地域コミュニティへ参加しにくいようです。そんな人が地域とのかかわりを持つきっかけに役立つのが、オープンカフェ。

オープンカフェは壁も扉もないで様子がわかりやすく、立ち去りやすい自由さがあるので、参加しやすいようです。初対面の気まずさがないオープンカフェで顔馴染みになると、屋内のコミュニティカフェ「地域の茶の間」に参加しやすくなります。

○そんなこんなで、コミュニティカフェ !!

建築系のメンバーで始めた、賑わいある都市景観を求める公共空間有効活用のオープンカフェが、空き家活用の「地域の茶の間」まで範囲が広がりました。「地域の茶の間」って福祉系じゃないの?と言われる方も多いですが、そういう縦軸社会を横に縫う仕組みが必要では……、と私たちは考えています。

福祉系といったって、子育て系、高齢者系、障害者系など、これもまた縦軸で分けられています。

構造物だけでは街ではありません。健常者だけが暮らしても街ではありません。全部ひっくるめて「まち」なのではないでしょうか。

さらに、この「まち」を持続可能にするために、各々の地域特性を持つコミュニティを育む場として、「コミュニティカフェ」が求められるようになりました。「コミュニティカフェ」の屋内型（地域の茶の間）、屋外型（オープンカフェ）を組み合わせ、誰でもが参加しやすい場づくりが大切だと考えます。

牛窓本町に生まれた、地域の茶の間「てんころ庵」

瀬戸内市牛窓町牛窓本町。65歳以上の高齢化率が49%、20歳以下が8%という、「しおまち唐琴通り」のほぼ東端に本町があります。その表通りから奥へ入った路地裏へ、地域の茶の間「てんころ庵」が完成しました。

牛窓本町とは

現地「しおまち唐琴通り」は中心部から関町、西町、本町、東町と続く4町で成り立っています。江戸期は朝鮮通信使の寄港地として、池田藩直轄の港町でした。海岸線に並行した「しおまち唐琴通り」の商家の裏には、山頂の神社仏閣へ連なっていく山肌へ張り付くように建ち並んだ庶民の家と細い路地が、漁村らしい下町を形成しています。

関町は街の玄関として大きな商店が賑わい、西町は藩主の御茶屋や旅館、本町は漁師町、東町は木船の造船町として栄えた地区でした。しかし、陸路が発達するに従い、鉄道のないこの地区は一挙に時代に取り残され、県南唯一の過疎指定を受けることになりました。現在、65歳以上が過半となっていますが、介護認定者はそのうちの20%に留まっており、元気な高齢者の街です。

事業の始まり

私達はこれまで人材育成としてまちづかいリーダー塾を開いてきました。今回の事業は、このリーダー塾の2009年度の修了生が主催する、関町オープンカフェ実行委員会から出てきた、「オープンカフェの弱点である季節や天候に左右されない住民が集まれる地域拠点がほしい」という声から始まりました。

地区で、孤独死が発生したことがきっかけとなり、住民からコミュニティ強化のために、地域拠点づくりの発案があったのです。「4町が各1か所の地域拠点を作り、各町が月一回開催すれば、毎週どこかの町内でコミュニティカフェが開催されることになる。月一回なら、できないこともない」との話し合いによって、この事業は動き始めました。

「まちづかい」をコンセプトに公共空間を使ってオープンカフェを開催。はじめは誰も座ろうとしませんでしたが、顔なじみになるにつれ、散歩の途中に立ち寄るなど常連も増えてきました。



事例見学に来られた玉野市藤井地区の皆さんに、少子高齢化・高齢独居等、同じ課題を持つ立場として小さな質問にも丁寧に応える、笑顔の素敵な「てんころ庵」世話人平野さんと代表の中村さん。



てんころ庵のある町内の表通り、通称「しおまち唐琴通り」約1km。池田藩直轄の朝鮮通信使の寄港地として、人影で路面が見えないほど賑わっていたかつての商店街。江戸期から続く空き家が多いが、家財道具や仏壇があるため賃貸にもできず、ひっそりと瀬戸内の陽光にまどろむ街並み。

中心になったのは「牛窓しおまち唐琴通り保存と活性化プロジェクト」のみなさん。空き家を提供しようと名乗りを上げたのは関町の炭邸邸。討議する間に岡山理科大学の建築学科が卒業制作の一環で、拠点として改装工事をすることになり、「風待ち亭」をオープンしました。並行して3軒隣の高祖米店さんが空き家を提供すると協力を申し出してくれ、手直しして立ち寄り拠点「米屋」を作りました。これで関町には、従来の観光ボランティア待合所「千當丸」のほか、「風待ち亭」「米屋」の計三か所の空き家利用の拠点が生まれました。

また、東町でも「汐菜亭」と「牛窓ミュージックホール」の所有者が古い米蔵を改装して開放。その流れを受け、今回は本町の空き家を活用し拠点を作ることになりました。

本町、まずは空き家調査

観光客が通る唐琴通りは大きな商家が並びますが、住民のほとんどが路地裏の下町に暮らす本町は漁師町です。住民は自分たちの暮らしの空間にこそ、自分たちの地域の茶の間があるべきだと考え、路地裏の空き家を選びました。

その空き家は、みんなが大好きだったイトヨさんが住んでいた家。数年前に亡くなつてからは空き家となり、雨漏りもします。四畳半2間と六畳1間。かろうじて台所やトイレ、風呂もありますが、柱は傾き、床は腐って、ところどころ抜け落ちていました。

この空き家を紹介された私たちは、少し躊躇しました。手持ちの資金で、拠点に使えるように改修工事ができるのだろうか?ここへ資金を投じて大丈夫かな?こんなところに、本当に人が集まるのだろうか?

空き家があるのは、表通りから緩やかな傾斜の路地を12mほど上がつた狭い四つ辻。突き当りの10段程度の階段を上がりると平たくなり、山の向こうへ下り坂が続いています。平たい場所の右手に10段程度の階段があり、それを上ると山頂となり海岸山妙福寺館音院、通称「東寺」があります。

路地の幅員は1.2~1.5m程度。自転車はすれ違えません。車なんて絶対に入れません。重なり合つた軒の間を、曲がりくねつた路地が網のように走っています。……「かくれんぼ」したらみつからないかも。家の横の路地は、夜になると妖怪「てんころ」がコロコロ転がりながら、追いかけてくるそうです……?



他に適切な場所がないか、岡山大学の学生の手を借りて、空き家調査をしました。本町には他にも、江戸期の立派な建物が住まい手を失い、空き家となつて眠っていました。そのままでは、いずれ朽ちていきます。

それでも、住民は「ここがいい」と言いました。着工予定期日を2か月超えて話し合つても、その希望は変わらなかつたので、何の変哲もないボロ屋(失礼!)を、「地域の茶の間」に改修することになりました。

実のところ私たちは、大正以前の建物で、地域の宝である瀬戸内の海が見える地域拠点をイメージしていました。



気軽に質問に答えてくれる住民の皆さん。
まるで息子たちが帰ってきたみたいだと、
学生のヒヤリングを楽しんでくれました。

本町の拠点づくり、始まり物語

地域の方々へ改修の内容を説明しているうちにおもむろに解体が始まり、それが自分の思いを込めて改修工事を始めました。図面なんかあつてないがごとく、「ここはこの方がええな——」「ここは、これでよかろう」「あそこは、いいようにしておいたから」ってな感じ。あれよあれよという間に、みんなの使いやすい地域拠点が出来上がりました。

トイレや電気や建具など、専門的な部分は地域の専門家に頼み、後はみんなで工事をしました。材料も地域の材木屋が安く分けてくれ、おかげで手作りの温もりのある素晴らしい地域の茶の間「てんころ庵」が生まれました。

本来、車の入れない路地裏なので、解体も手作業、廃材の搬出も人力、材料の搬入も人力のため、普通より人件費が3倍かかる工事でしたが、難なく予算内で完工しました。

しかし、ここで問題。床の補強と畳替え工事の予定だった床を土間にしましたため、テーブルやイスの機材購入が必要になつたのです。「やっぱり、木でてきた机がいいよなあー」「予算残ってる?」

中古店で探してもイメージに合うものではなく、検討の結果、昔の小学校の机を模した机セットを見つけ、購入しました。普通に並べると教室風、合わせて並べると給食時のように会食テーブル風。座つてみた住民は、まるで子どもに戻つたように、



本町運営の熱い討論会議からはじまり、おもむろに解体工事、そして改修計画と着々と作業が行われました。話し合いを進めながら、板の間や昔の学校風木の机、仲良し観音の設置など、こだわりがつまつた「てんころ庵」が完成しました。

この地区には男性の一人暮らしが目立ちます。そのほとんどが元漁師。船の上で料理も洗濯もやつたため、一人暮らしにさほど不便も感じず、高齢を迎えてます。声が掛かれば日雇いのアルバイトに出かけ、何もなければ海に出て漁を楽しむ。悠々自適な年金暮らしを過ごしています。

そんな彼らにとって、この地域拠点「てんころ庵」は隠れ家の井戸端会議の場です。他人の家へ上り込むのは気が引ける。かといって、自宅へ呼ぶには気まま暮らしにとって片付けなど面倒。「てんころ庵」には、自由に飲めるお茶が用意されており、弁当持ち込みも可能。気楽に弁当を持ち寄り、自前の冷酒を交わしながら、井戸端会議に花が咲きます。表を通った人が笑い声につい仲間に入つて一杯いただくことさえも。



女性が、健康体操や手作り教室で活用計画を立てて集まるのとは一味違う、「地域の茶の間」が始まりました。けつして男女の仲が悪いわけではありませんが、漁師町の女性は元気がよく地域活動に忙しい。少子高齢化のため、地域に少ない若手は共稼ぎで忙しい日々を過ごしています。その結果、地域活動はリタイア組が全部引き受けることになっています。団塊の世代の上の高齢者の介護も含め、1人3役5役はざらです。

そんなわけで、日頃の「てんころ庵」は男たちの井戸端会議場となっています。特段スポットが当たる場ではありませんが、着実に地域の拠点として、「てんころ庵」はその存在感を發揮し始めています。

課題

運営経費の捻出が大きな課題となっています。少しでもお金をしようと、不用品を持ち寄り、バザーを開催しました。また、「てんころ庵」の通常の利用は200円が定着しつつあります。トイレの使用料は100円。まだ汲み取り式なので処理代が結構高いのです。しかし、それだけでは足りません。



お食事処にしたいという希望が出てきました。それを始めれば、安否確認もできる配食サービスができます。しかし、前述のように女性が忙しい町なので、男性が厨房に入るようになれば可能ですが、そこまで行くには遠い道のりがありそうです。まずは月に1回の惣菜屋開催を考えています。

この地域で月に1回惣菜屋を開いている「潮まち処」は、1日で4万円ほど売り上げています。これをあと1回増やし「てんころ庵」で開催すれば、毎月の固定費は安定します。ただ、「潮まち処」は表通りの誰もが立ち寄りやすい立地であるのに対して、「てんころ庵」は住民しかわからない路地裏です。どうやってここへ地域以外の人を呼び込むか、それが一番の課題です。



「まち」を使って元気を育む「まちづかい塾」。御用命あればいつでも、みなさんのまちへ応援に行きますね♪～



「てんころ」とは草履の材料となるわらを打つ道具のこと。ころころ転がつて地域に笑顔が溢れることを願って「てんころ庵」と命名しました。

エピソード

同じたまり場なら、海が見えるとか、きれいな街並みの中を選びたいのはよそ者の考え方で、地元の人たちにとっては景観より利便性優先でした。この地域には、木造の江戸末期からの家が空き家となりたくさん残っています。私たちはそんな建物を修復し、地域拠点にしたいとイメージしていました。しかし、住民と話すたびに、それはよそ者の考えだと思いました。

今回の事業は、高齢者の見守りや引きこもり予防のための地域拠点づくり。街並み保存が目的ならば、街並み景観を良好にする要素の建物を選ぶべきでしょうが、福祉的目的が強い今回のような場合には、住民が集まりやすく、愛着が持てる場所を選ぶべきだという結論に至りました。

住民が言うには、「しおまち唐琴通り」は商家、しかもそこそこの豪商が並ぶ区域で、庶民には一線を引く場所になるから、余計に庶民ゆかりの路地裏を希望するそうです。今回活用した裏路地の家は、傷みも激しく、建物としての魅力には欠けますが、地域住民がなじみやすく、気持ちが安らぐならば、ここを拠点として改装しようと考えました。

このあたりは漁師町で、狭い部屋に何人もの家族が寄り添って生活していたといいます。美味しい魚料理も時々供される、笑い声の途切れない地域拠点が期待できます。

今後の予定

初めての運営会議

この拠点をどのように活用しようか、運営会議が始まりました。さっそく、それぞれが温めていた十人十色の案が噴出しました。

1.
閑町が各門戸にオリーブの植木鉢を置く話を聞きこんできましたHさんは、今なら閑町に寄付されるオリーブを本町にもいただけるから、「てんころ庵」のある路地に、オリーブの植木鉢を並べてオリーブ通りにしましょう。

◎オリーブは牛窓の象徴だから、それを並べるのは賛成。さっそく苗をいただけるように手配してください。

2.
毎週一回はここを使って、筋ドコ体操(筋肉トレーニング)をしましょう。

◎隣の西町は高齢化で今年から筋ドコ体操をやめたそうだから、続けたい人にはここへ来てもらえばいいよね。では、隣町へも回覧板を回しましょう。



3.

一人暮らしの安否確認に玄関先へ旗を立てる話を聞いたことがある。この地区でもしたらどうかと考えていたんだが。
◎私も何か必要と思ってたし……。
◎だったら、みんなでここへ集まって作つたらいい。旗のデザインはKさん考えてきてね。

4.

そうそう個人情報パックを非常時用に作っている地域を知ってるけれど、この地区でもみんなで作ろうよ。一人暮らし始めたから作ろうよ。
◎Yさん、作り方を聞いてきてね。夏までには各戸に配れるようにしよう。

5.

それより、ここを地域の茶の間に開けるのはどうする?
◎最低週末は毎週開けるように、当番を決めよう。2、3人ずつ交代で組むといいかわ。

6.

どうせなら、美味しい物を売って観光客が来るようにしたいけれど……。
◎だったらKさんが料理上手だから、頼んでみましょうね。

7.

待つだけではなくて、どこかに事例を見学に行こうよ。とか、予算作らなくちゃ。
◎やっぱり見て、学ばなければ、時代に取り残されますよね——。

8.

夜カフェもしたいけれど、どうかな?
◎一人暮らし増えてきたし、夜、一緒にテレビ見ながら過ごす時間もこれからは大切な財産になると思う。

9.

夜カフェの前に安否確認のお弁当配達サービスを始めたいけれど……。
◎だれが作る?
◎弁当屋から安く仕入れる事もできるんですね。
◎温かいうちに配り終えたいから、一人の持ち分は少なくて配達人を増やしましょうね。
◎それって地域の雇用促進になるかも……。

このように、どんどんアイディアや地域のニーズが検討されました。近くにコミュニティハウスがありますが、今後は「てんころ庵」の利用度が高くなりそうです。空き家の温もりや土間仕様の使いやすさ。友だちの家だったという気安さ。いろんな要素が、廃墟に近い空き家をこんなに素敵なお拠点に生まれ変わらせ、おとなしい住民から積極的な生き方を誘引し、地域の元気が育ち始めています。